

VI 表現化に視点をあてた研究のまとめ

私たちは、過去4年間にわたり、将来の社会自立にむかって、子どもたちが秘めている表現する力を、いかに引き出し伸ばしていくかということに取り組んできた。将来の社会自立を考える上で、自己をどう表現するかということが最も大切なことだと考えたからである。

「表現とは、意志の伝達であり、社会自立をめざす指導とは、表現する力を獲得・拡大し、生かし使えることである」という考えに立ち、精神薄弱児にとって、最も効果的な教育課程とはどのようなものであるべきか。また、その指導は、どのような方法が効果的であるかについて、実践・研究をかさね、改訂を通して本年度を迎えたのである。

本年度は、子どもたちが学習の中で、生き生きと取り組み、日常生活・仕事に定着していく姿を的確に追いながら、日々の授業実践・研究を続けてきた。

一人ひとりの子どもは個性的であり、表現もまた個性的である。従って、子どもの行動やことばの奥にあるものを素早く読み取り、全体像をみつめ、集団とのかかわりの中で社会化する方向を見定めながら、指導することが、表現化に視点をあてる指導の教師の態度として重要なことをあらためて痛感した。

表現化は、個の問題が語られなければならない。子どもたちの障害が多様化し、その程度も重度化を増してくる傾向にあり、個に徹する、個を中心とした取り組みについてもっと深めなければならないと思う。ともすれば、学校教育万能主義に陥ろうとする傾向を戒め、保護者、社会との連携の問題等、たくさんの課題をまだまだかかえているのが現状である。

教育の成果は、10年、20年の長い目でみなくてはわからないものだと言われる。しかし、この4年間に私たちの一貫した姿勢が、実践が、わずかながらも子どもたちの上に生き生きとした姿となってあらわれたのではないかと考えている。

私たちの研究の成果は、必ずしも十分なものとは言えませんが、この研究が精神薄弱教育の一助になればさいわいと思います。ご高覧の上、今後の私たちの教育実践にご教示を賜りますようお願いいたします。